5. 骨・軟部腫瘍の診断における ^{201}Tl シンチグラフィの有用性

興津　茂行　　牛嶋　　陽　　奥山　智緒
杉原　洋樹　　前田　知穂　（京府医大・放）

^{201}Tl シンチグラフィは肺癌を始め，各種悪性腫瘍の診断や治療効果の判定に用いられている．今回，骨・軟部組織の良性腫瘍の診断での有用性について検討したので報告する．

対象は骨腫瘍6例，軟部腫瘍5例の計11例で，男性6例，女性5例．年齢は10～86歳で，平均年齢は32歳．使用装置はPICKER社製PRISM2000と東芝製GCA901Aで，コリメータは低エネルギー高分解能型を使用した．^{201}TlCl 111 MBqを静注後，15分にて早期像を，3時間にて後期像を撮像した．前面および後面のPlanar像を撮像し，軀幹部の場合はSPECT像を追加した．筋肉以外の軟部組織の集積を基準に，(－)，(±)，(＋)，(++)の4段階に分類し，早期像と後期像での集積を視覚的に評価した．結果は早期像で(－)1例，(±)4例，(＋)4例，(++)4例で，後期像では(－)1例，(±)4例，(＋)3例，(++)1例で，集積低下を認めたもの8例，集積低下を認めなかったもの2例であった．従来の報告では良性腫瘍の90%以上で，後期像で集積が不変あるいは低下していたといわれている．今回の検討でも，集積を認めたもののうち80%に後期像での集積低下を認めており，従来の報告と合致し，良性腫瘍の集積パターンと考えられた．しかし，悪性腫瘍でも約30%で後期像での集積低下を認め，約45%で集積不変であったとの報告があり，良悪性の鑑別には，視覚的な集積変化のパターン分類のみでは不十分である可能性が考えられた．今後の検討課題として，視覚的評価では，分類の基準がやや不正確となるので，カウント比を算出し，評価する必要があるように思われた．

6. 当院における唾液腺シンチグラフィの検討

野村　曜子　　加納　恭子　　岸田　浩明
柳瀬　正和　　松本　敏幸
（兵庫成人病セ・放）

昭和62年から平成7年4月までに唾液腺シンチグラフィとガリウムシンチグラフィを施行した唾液腺腫瘤を主訴とする症例のうち，手術によって病理組織学的診断が得られた38例を対象に核医学検査の術前検査としての有用性を検討した．

唾液腺腫瘍の手術適応は，多形性腺腫や悪性腫瘍などのワルチン腫瘍以外のものが第一の適応となるため，ワルチン腫瘍とそれ以外の腫瘍を鑑別するためのフローチャートを設定し，38例を検討した．その結果，38例中9例をワルチン腫瘍と診断し，29例をワルチン以外の腫瘍と診断した．一方手術によって得られた組織学的診断は，9例中7例がワルチン腫瘍で，ワルチン以外の腫瘍と診断した29例中1例がワルチン腫瘍であった．フローチャートにのっとってワルチン腫瘍を診断すると敏感度87.5，特異度93.3と良好な結果が得られた．

以上より唾液腺腫瘍の手術適応の決定に際し，^{99m}Tcパーテクネテートとガリウムを併用した核医学検査が有用であると考えられた．

7. 頭頸部腫瘍における FDG-PET の臨床応用

阪本　浩一　　松田　美貴　　大橋　淑宏
中井　義明　　（大阪市大・耳鼻）
河辺　譲治　　岡村　光英　　越智　宏暢
（同・核）
小橋　肇子　　城村　尚登　　（同・三内）

［目的］われわれは頭頸部腫瘍に対する ^{18}F-Fluorodeoxy-glucose (以下 FDG) を用いた Positron emission tomography (以下 PET) の有用性について検討してきた．今回悪性疾患における腫瘍の糖代謝と進行度 (T分類，Stage) の関係，放射線化学療法前後の糖代謝の変化，および組織学的効果との関係について検討した．［対象］大阪市立大学耳鼻咽喉科にて加療した原発性頭頸部悪性腫瘍25例である．内訳は鼻副鼻腔6例，舌・口腔底8例，上咽頭3例，下咽頭2例，喉頭2例，耳下腺1例，原発不明頸部3例．男性19例，女性6例．平均58歳である．［方法］院内小型サイクロトロンにより作製したFDGを，185–370 MBq静注した．静注開始後から40–55分後に撮像しPET画像より病変部の放射能濃度を測定した．集積程度を Distribution Absorption Ratio (以下 DAR): 組織放射能／(注射量／体重) で評価した．これを治療前に行い，治療後にも施行した．［結果およびまとめ］治療前の腫瘍の糖代謝は進行度についての検討

Presented by Medical*Online